

「娼婦」・ウェイトレス・妻：女性の身体をディシプリンする日本語メディア（1908-1920年バンクーバーの事例）（講師：美水彩加）

こんにちは。マスキームの領土にキャンパスを構えるブリティッシュ・コロンビア大学アジア学部の美水彩加と申します。

今日は、20世紀初頭のカナダで、日本語メディア、特に、バンクーバーを拠点としていた大陸日報において日系の女性がどのように表象されていたかをお話しします。

特に、1908年から1920年の間に、新聞が理想の女性像あるいは「墮落した」女性像をいかに構築し、移住者である日系女性の身体をディシプリンする役割を持っていたかに注目します。

また、大陸日報の出版物から、そうした言説に対する女性の抵抗を示す例もお見せします。

20世紀初頭の北米の日系コミュニティにおいて、日本語新聞は重要な情報源で、本国や世界各地から電報で寄せられたニュース、移住先のローカルニュース、北米の日系コミュニティや他の移民に関わるニュースなど、報道内容は多岐に渡りました。

それ以外にも、日本語新聞はエンターテインメントを提供し、コミュニティビジネスを促進し、また社交の場でもありました。

このように日系ビジネスの広告が紙面を大きく占め、レストランのレビューや、噂話、また文芸作品も掲載されています。

文化や言葉の壁があるため、主流の出版物に参入できない移住者にとって、日本語新聞はアマチュア文芸活動の場となったのです。

移住者の作家が投稿した作品は、明治日本でよく見られた「続きもの」と呼ばれる形で掲載されました。

19世紀の終わりから20世紀初頭にかけて、北米の日系コミュニティは単身男性の労働者が多くを占め、女性の数は限られていました。

その結果、女性の多くは男性のニーズに応える形で、ウェイトレス、酌婦、「娼婦」として労働力を提供しました。

結果、新聞紙上の文芸作品にも、男性労働者と性産業や水商売に従事する女性との間のロマンスを描くものが数多くありました。

ときに、いわゆる「墮落した女性」が主人公として同情的に描かれることもありました。

例えば、山口県出身の若き作家、永原小村は、ロサンゼルスを拠点とする羅府新報という新聞で「お里さん」という作品を出版しました。

この物語に登場するお里は、夫を追ってアメリカに移住したのち、仕事もせず博打に没頭する夫に困り果て、リトル・トーキョーの歓楽街で酌婦として働くこととなり、その後みずから飲み屋を経営します。

また、シアトルの大北日報で1911年4月に、「女あき」というペンネームで投稿された「姦通」という作品がありますが、ここでは、既婚者である主人公の女性が、酔っ払いで暴力的な夫の陰で、若くて優しい男性と関係を持つようになる様子が、一人称で語られています。

このような新聞には、フィクションのみならずゴシップ記事も掲載されました。

当時の日本の新聞と同じく、移住者の新聞も、エリートよりは同胞庶民層の「不道德」な素行を摘発する側面を持ちましたが、中でも女性はターゲットとされました。「娼婦」、酌婦、ウェイトレス、不倫関係にある既婚女性などが、批判や非難の対象となりました。

このように、20世紀初頭の北米において、日本語新聞は、明治の「良妻賢母」のイデオロギーをもとに、移住者のコミュニティに対して「模範的」あるいは「墮落した」女性像を提示し、規律をつくり出す教育機関的な役割を持っていたのです。

1907年から1941年まで新聞を発行していた大陸日報の初期の記事を見てみましょう。

ここに「夫の讚美する妻の資格」という記事があります。既婚者男性の一人称で、16項目がリストしてあります。例えば、「わが妻は容姿に嗜みあり」、「わが妻の貞操は之を疑う余地ある事なし」、「わが妻は唯一の補佐者なり」、「わが妻の縫る衣類は着心地よし」、「わが妻の調味せる食物悉く美味なり」、「わが妻は克く兒女を教育して誤らず」。ここに示されたような基準から逸脱した女性は非難の対象となりました。

中でも「魔窟探検記」と題した続きものは、あからさまに女性の身体をディシプリンする場として、長期掲載されました。

このシリーズは長田正平という記者が執筆し、1908年11月19日から1909年2月13日まで71回にわたって掲載されました。

当時カナダで性産業に従事した日系人の男女を「赤鬼青鬼」、「阿婆擦れ」などと呼び、彼ら彼女らの身元を明かし、素行を暴くことで、カナダでの同胞による性ビジネスを駆逐しようとしたのです。

長田は、日本人の「魔窟」（娼館）の存在が、白人による日系人差別を助長していると考えました。

このシリーズが掲載されたのは、1907年の反アジア人暴動の直後でした。

この白人による暴動を受けて、1908年には林レミュー協定が結ばれ、カナダに入国できる日本人の数が制限されることとなりました。

「良妻賢母」の言説が、カナダにおける日系コミュニティでどのように機能したかを理解するには、白人の入植者が支配するカナダの植民地社会において、アジア系移住者が経験していたあからさまな人種差別について知る必要があります。

それについてはまた別の機会に譲るとして、本題に戻ります。

「魔窟探検記」は、1907年6月の創刊直後、すでに倒産しかかっていた大陸日報を立て直そうと着任した、山崎寧の経営のもと発表されました。

一世のモリタ・カツヨシ氏によると、前社長の柏氏は、就任当時「風紀」に関するある記事を掲載したことで、ある方面から脅迫にあい、経営が困難な状況に追い込まれていました。

それに対して、1908年3月に新聞社を引き継いだ山崎氏は、そういった圧力には屈せず、むしろ「風紀を乱す」行為に対して、むしろ積極的に立ち向かったといえるでしょう。

山崎氏は、それ以前はシアトルの北米時事という別の新聞社を経営していました。

その当時、シアトルのダウンタウンには、日本人の「娼婦」や娼館経営者、護衛、斡旋業者などが目立ち、性ビジネスによって生まれた資金がコミュニティ全体の経済に大きな影響力を持っていました。

北米時事はまさにその資金が元手となっており、山崎が辞任した理由となりました。

大陸日報で心機一転を試みた山崎は、部数売るだけでなく、性ビジネスと闘うことも目標としていたのかもしれませんが。

魔窟探検記は性ビジネスに関わる人々を「赤鬼青鬼」や「阿婆擦れ」などと呼び、実名、ニックネーム、出身地などを暴露しました。

記事には大げさな表現が目立ち、実名やキーワードが大きなフォントで強調されています。

殺人事件や内輪のもめごと、また男女関係のスキャンダルが細かく描写され、「阿婆擦れ」とされる女性の、凶暴で野蛮で「異常」な性質が誇張されています。

ときには娼館の様子が面白おかしく語られ、こっけいさや無意味さが描写されている記事もあります。

魔窟探検記は読者の支持を得たようで、最初のシリーズは本の形に再編成され、娼館で働く女性のポートレート写真とともに、『加奈陀（カナダ）の魔窟』というタイトルで1910年に出版されました。

また、このシリーズは続編もあり、1912年の3月1日から4月6日まで、32回にわたって掲載されました。

魔窟探検記の他に、大陸日報は報道記事、ゴシップ記事、論説などを通じて、ことあるごとに、逸脱した女性像と理想の女性像を提示します。

不倫や愛人との駆け落ちは、女性を公に罰する恰好のネタで、肌を露出したり、通りで口を開けて笑うことですら非難の対象となりました。

同時に、大陸日報は模範的な女性を表彰することにも積極的です。

例えば、読者に投票を呼びかけ、同胞移住者の中から模範的市民を選ぶという企画記事がたびたびあったようですが、女性については「模範的婦人」と「ウェイトレス」の分野がありました。

ここにあるように、「模範的婦人」には8人、「ウェイトレス」には12人が選ばれています。

女性の名前と得票数が表示されています。

さて、当時の日本料理屋で働く女性は、芸者に求められるような性的な意味合いを含む役割を担っていた場合もありましたが、そのあたりは曖昧で、むしろ「清らか」なウェイトレスが望まれることもありました。

記者や読者によるゴシップ記事に、美人で気立の良いウェイトレスの噂がのぼることもよくありました。

「料理屋のぞき」という日本料理屋のレビュー記事には、食事やサービス、そしてウェイトレスの評価が詳しく掲載されています。

ここに、「ウェイトレス資格試験成績表」とありますが、「試験」がどのように行われたかについての説明はありません。

先のスライドでお見せしたように、読者による投票で成績がつけられたのかもしれませんが。

ウェイトレスの名前の上に、容貌と技芸について、それぞれ点数が表示されています。

このように、大陸日報のようなコミュニティ新聞は、男性記者や読者によって、女性の身体をディシプリンする場としての側面を持っていました。

それでは、家父長制のもとにコミュニティの規律が確立されていた初期の日系コミュニティにおいて、女性は単なる犠牲者だったのでしょうか。

そのような力に、女性が抵抗することはあったのでしょうか。

またどのように切り抜け、自分たちのスペースを作ったのでしょうか。

残念ながら、大陸日報の記事はほとんど男性によって書かれており、女性の声を直接反映したものはほとんど目立ちません

でも、家父長制のもとで行われるディシプリンに、女性がどう応じ、抵抗していたのか、私たちの読み方次第では、アーカイブの出版物や紙面の中に新しい発見を見出すことができるかもしれません。

事実、女性はいつも身体の支配に対して、屈していたわけではありません。

女性のために、女性について書いた女性の記者もいました。

大陸日報に投稿していた女性の中で、特に著名なのは、田村俊子です。

デビュー作である「あきらめ」は、良妻賢母のイデオロギーにあらがい、プロの作家としてのキャリアを追求した女性が主人公で、不倫や同性愛など、逸脱的なセクシュアリティを描きます。

夫の田村松魚は、年も作家としての経験も上でしたが、俊子は夫を凌ぐ作家へと成長します。

俊子は、1918年に東京からバンクーバーへ移住します。

朝日新聞を辞めて大陸日報に入社した鈴木悦というジャーナリストのあとを追ってきたのです。

ともに、日本での婚姻関係を捨て、バンクーバーで新しい関係を築こうとしたのです。

日本の活発な文学シーンを離れ、俊子のカナダでの執筆活動は限定的なものとなりましたが、大陸日報の紙面でフェミニストとしてリーダーシップを発揮します。

同胞女性の意識を高めようと、1919年8月から「土曜婦人欄」というコラムを発表し、女性の権利について論じました。

このような直接的な運動だけでなく、紙面上のアンビバレントな女性の表象の中に彼女らの抵抗を見出すこともできます。

これらの表象は、もともと移住者コミュニティの中で、女性の身体を管理する目的でつくられたものですが、図らずも、どこか「悪女」批判を揺るがす側面を持っています。

たとえば、『加奈陀の魔窟』の挿絵となった、娼館で働く日系女性のポートレートは、粗暴で、下品で、嘘つきといった、いわゆる「娼婦」のステレオタイプからはかけ離れています。

むしろ、落ち着きと気品によって洗練されたその姿は、「悪女」をその他の女性から隔てる壁の存在に疑問を投げかけます。

今のところ、カナダで私がアクセスできた『加奈陀の魔窟』は、複製されたこの一点のみで、残念ながら画質は良くありません。

それでも、これらの写真は、日系コミュニティや広く北米社会の歴史において、彼女らが果たした社会経済・文化的な役割を記録、記憶するものといえるでしょう。

最後に、もう一つ、アーカイブを批判的に、クリエイティブに読む試みとして、女性の身体を男性のまなざしの対象物とする力に対して、反抗的なあり方を示唆する例を紹介します。

ここに、頓狂軒という寄稿者による、小さな「夢占い」の記事があります。

これも連載もので、読者から募集した夢を占います。

ここに示したのは1908年4月16日の記事で、夢の投稿者はウェイトレスです。

頓狂軒による占いは、性差別的な表現を含む、残念な内容となっていますが、ウェイトレスの夢は興味深いです

みなさんなら、どう占いますか？

問、妾は御存知の通り料理屋のウェイトレスですが、一昨夜誠にすまない夢を見ました。お客が莫迦な真似をしたからツイ腹が立ってナイフで腕を切った夢を見ましたが、何だか縁起が悪いから、一つ占って頂戴。○や子。